
サムライダンジョン

shirou

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サムライダンジョン

【Nコード】

N1507V

【作者名】

shirou

【あらすじ】

世界最大の迷宮を有する都市ロマリウム。冒険者たちでいっぱい
のその街を、東方出身の侍である氷雨が訪れた。凶悪な魔物と狡猾
な罠が渦巻く迷宮が立ちふさがる中、彼ははたして自ら望む最強の
冒険者へと成り上がることができるのだろうか……！？

第一話 謎の男

安酒の匂いが堆積したような古臭い酒場風のギルド、アカシア。そこでは今日も、探索にもまともに出かけないごろつき寸前の三流冒険者たちが話に花を咲かせていた。彼らは賭けで儲けただのどこぞの娼婦が美しいだのと、昼間から酒をありながら下品なまでの大声で話している。その奥にあるここ数日利用者の影すらまばらなカウンターでは、受付嬢のリアルが漂う酒の匂いに顔をしかめながら、たむろしている彼らに殺気だった視線を向けていた。

「あいつら碌に探索もクエストもしないで酒ばかり飲んで……。おかげでギルドが倒産寸前じゃない！ 今日こそ文句言ってやろうかしら？」

リアルの手元には、ここしばらくの間クエストの受諾印が押されていない台帳があった。彼女はそれを手に握りしめると、白い額に青筋を浮かべて強烈な殺気を放つ。アカシアのある冒険者の都市口マリウムには無数のギルドがあるが、数日間一つもクエストが受諾されないギルドなどリアルは聞いたことがない。このままでは、今月の給料すら支払われるかどうか危ういようにリアルには思われた。そうしてリアルがコンコンといら立ちまぎれにペンでカウンターを叩いていると、不意に彼女の頬をさわやかな風が撫でた。彼女はとっさに風が吹いてきたギルドの入口の方を見る。すると、開け放たれた扉の向こうに見慣れない格好をした男の姿が見えた。

リアル記憶では確か着物といった、東方風の衣装を身に付けたその男は黒髪黒眼をしていた。この大陸では黒髪黒眼の人間はいないので、おそらくこの街が面しているシナウス海を越えた先にある

島国の出身者だろう。その証拠とでもいうべきか、着物はボロボロでまだ少年に見える男の顔は長旅の疲れを感じさせた。

彼はギルドの中に入ってくると、臆することなく酒を飲んでいた男たちに近づいて行った。そしてその方をポンとたたいた。

「すまんが、ここはギルドでござるか？ 街に来たばかりの拙者にはまだよくわからんのだが……」

「大丈夫、ギルドはここだぜ兄ちゃん。クエストの依頼にでも来たのかい？」

「いや、拙者は冒険者になりきたのでござる」

「ガハハハ！ やめとけよ、冒険者は兄ちゃんのような田舎者がなれる職業じゃないぜ！」

「そうだぜ、怪我しないうちにやめときな！」

酒を飲んでいた男たちは椅子にふんぞり返って豪快に笑いだした。訪ねてきた男の風体はいかにも田舎の農民といった風であり、とても戦いをこなしてきたようには見えない。いかにも英雄願望の強い片田舎の貧乏農民が冒険者にあこがれて、里を飛び出してきたぐらいにしか見えないのだ。そのまともな武器すら帯びていない格好には、男たちだけではなくルールも顔をしかめる。冒険者の世界は厳しく、田舎から出てきた元農民というような冒険者はほぼ生き残れない。せいぜいなれたとしても、この酒場でたむろしているような碌にクエストもこなせない三流冒険者だろう。

「うづむ……忠告はありがたく受け取っておこう。されど、拙者は

どうしても冒険者にならねばならんでいける」

「ハハハツ、そうかい。なら止めねーよ！」

「せいぜいがんばれよツ！ 兄ちゃん！」

嘲笑に見送られながらも、着物姿の男は至極明るい顔でカウンタ―へとやってきた。ぼうつとしていたリールはあわててびっくりしたような顔を見ると、ギルド登録用の書類を取り出す。この書類を棚から出すのは、彼女がギルドの職員になってからの半年間でわずか二度目のことであった。久しぶりの手続きのためか、彼女の顔が少しばかりきりりと引き締まる。

「いらっしやいませ、当ギルドへの登録手続きですね？」

「そうはいけませんよ」

「でしたらまず、この書類にお名前と現住所をお書きください。住所は泊まっている宿の名前などで十分です」

男は何故か困ったように顔を曇らせた。リールはひよつとして文字が書けないのかと勘ぐる。彼女は代筆するのに備えてペンをそつと手元に持ってきた。すると男が気恥ずかしそうに口を開く。

「……実は最近持ち合わせがなくなって……。その……野宿なのでいける」

「あ、あきれた……。さすがにそれはないわよ！ まあいいわ、住所は書かなくても結構。……って口調が素に戻ってるじゃない、ごめんなさい！」

「いや、その口調で構わんでござるよ。拙者も堅苦しいのは苦手ですわね」

「そう、ありがと。それならこれからこの口調で行くわ」

リールはほつと息をつくとにつこり笑った。実をいうと彼女も敬語を使わない方が楽だったのである。それゆえに本心からなされた笑顔を確認すると、男は手早く書類に名前を書き込む。やがて差し出されたそれをリールが受け取ると、そこには流暢な東方文字で「氷雨」と書かれていた。東方文字の読めないリールは、それがなんと書かれているのかわからずに首を捻った。

「これって何て読むのかしら？ 私にはちょっと読めないんだけど」

「すまない、東方文字は読めないでござったか。大陸文字で書きなおそう」

「書きなおさなくても、読み方だけ教えてもらえばいいわ」

「ヒサメと読むでござるよ」

「ヒサメね、ちゃんと登録しておくわ。ではさっそくお待ちかねの能力測定ね」

リールはカウンターのの中から能力測定用の虫眼鏡を取り出すと、ヒサメの顔をそれで注意深く観察した。能力測定用の虫眼鏡は対象者の顔を写すとそのもの持つ能力などが表面に表示されるものである。どんなギルドにも一つはあるギルドの必需品だ。

そうしてしばらく氷雨の顔を虫眼鏡越しに眺めていたリールであったが、一瞬にしてその表情が凍りついた。彼女は何度も目をこすって虫眼鏡に表示された内容を確認すると、氷雨の顔を目を真ん丸にしてみる。すると氷雨は驚いたようにそのとぼけたような顔をしかめた。

「ど、どうしたのござるか？　もしかして拙者の顔に死相でも出ておったのござろうか!？」

「違うわよ！　あんたがあんまりめちゃくちゃな能力してるからびっくりしたのよ!！」

「なんだ、死相が出ていたおったわけではないのか。よかったよかった」

「よっくなーい!！」

こうしてリールの絶叫が、ギルドアカシアの小さな建物に響き渡ったのであった。

第二話 ギルド

大声で叫んだリールはそのあと、半ばあきれたような顔をした。

彼女はそのまま少し力の抜けた手で、氷雨に彼の能力をメモした紙を手渡す。その時、リールが氷雨に手渡した紙には次のように能力値が書きこまれていた。

名前：氷雨

攻撃：23

防御：18

敏捷：21

器用：22

知性：8

魔力：0

気力：139

職業：無職

称号：葛城神明流免許皆伝

特性：気力操作、気功剣、武士の心

これを見た氷雨はぼかんとしたような顔をした。その顔は「どがおかしいのかわからないでござる」ということを如実に表している。するとリールがふうつと息をついて、彼にこの能力が以下にあり得ないのかを説明し始めた。

「最初に言っておくと、普通の人間の能力がだいたいオール10なの。だから氷雨の場合、知性と魔力以外は平均をすべて大幅に上回ってるわね。でも攻撃とかはそこまで問題じゃないのよ。問題は…

…

「問題は？」

リールはペンを手にすると、それで魔力と気力と書かれた欄をビシッとさした。そして形のよい眉をぴくぴくさせると、強い口調で話します。

「この魔力と気力のバカみたいな値よ！ 気力は上級冒険者並みの値を示してるけど、魔力はまったくくない！ 普通に暮らしてたらこんなことありえないわよ！」

「そうなのでござるか？」

「そうよ、魔力も気力も普通はひとしく上がっていくものなの。だから氷雨みたいに、どっちかだけやたら高くて片方がないとかありえないのよ」

「ふつむ……」

氷雨はその細い顎に手を当てて、何か考え込むようなしぐさを始めた。リールは重要なことを思い出しているのかと期待して、きらきらとした視線を氷雨に送る。そうしてしばらくが過ぎると、氷雨は手を顎から離してぐっと背伸びをした。そして……

「すまんが、腹が減りすぎてて何も考えられなかったでござるよ…

…

「ば、バカー……！！」

ガチャガチャと皿が音を立てて積まれていく。その上にあつた料理はとうの昔に、氷雨の腹の中へと消えていた。彼の前に座っているリールは、その腹の中にオーガでも飼っているかのような食べっぷりに茫然としている。皿はすでに、見ていて倒れるのが心配になりそうなほど積まれていた。

二人はしばし登録説明を中断して、ギルドの中で食事をしていた。氷雨が腹を抱えてあまりにも切ない顔をしたので、見るに見かねたリールが彼に食事を食べさせたのである。もつとも氷雨はよっぽど腹が減っていたのか、奢ってもらっているということを見失念しているかのような勢いで食べているが……。

「まったく……。どんだけお腹すいてたのよ」

「いやあ、かれこれ二日間何も食べてなかったのでござるよ！ 正直とても助かったでござる！」

「あんた、能力だけじゃなくて生活もめちゃくちゃね。路銀の管理とかはどうしてたのよ」

「路銀……。ああ、金の事でござるか。船に乗るだけでなくなつてしまったので、そこからは狩りをしながら旅してきたでござる」

「……………」

ロマリウムから船の発着する港までは海路の関係上遠く、馬車で約一週間はかかる。人の歩きだとだいたい二、三週間といったところか。つまり、氷雨はその長い距離を狩りで食料をまかないながら延々と旅をしてきたということになる。

リールはそのある意味で超人的な行動に、感心したようなあきれたような気分になった。もう氷雨のことに關しておよそ突っ込む気にはなれない。何を言っても軽く受け流されてしまうような気がしてきたのだ。そのため彼女は、そのままボケつとした顔で次々と皿を空にしていく氷雨を見つめる。

氷雨はそんな視線は関係ないとばかりにそれからも食事をかきこんでいった。そうしてしばらく時が流れ、腹が風船のように膨らんだところで彼はようやく食事をやめて一息ついた。

「ふうっ、腹いっぱいでごゆる。こんなにつまいもの本当に久しぶりでござるよ」

「そう、それは良かったわ。さてと、説明を再開するからカウンターに戻るわよ」

「了解したでござる」

氷雨とリールは皿を厨房の方に片づけてくると、カウンターの方向へと戻っていった。すでにギルドにはかの冒険者たちの姿はない。おそらく花街にでも繰り出したのであろう。ここのギルドでたむろしている冒険者たちはほとんど三流であったが、金回りはだけは割と良かった。リールはそのことを少し訝しく思っているが、うつつとらしい連中なのでギルドに居ない分には文句は言わない。それに碌でもないことに巻き込まれるのは彼女もごめんであった。

「じゃあさっきの続きから行くわよ。とりあえず、能力の測定が終わったからさっそくカードを発行するわね」

リールはさきほど氷雨に見せた紙を、カウンターの脇に置いてあったなにもやら巨大な機械に入れた。すると機械はガタガタ音を立てながら何度も何度も震える。さらにしばらくすると取り付けられている水晶玉のようなものが、紅いあやしげな光を放った。それと同時にシュツと空気が漏れるような音がして、薄っぺらい銀色の板のようなものが吐き出される。

リールはそれを手に取ると氷雨へ手渡した。氷雨がそれを見てみると表に名前、裏に能力が書いてある。どうやらこれがリールの言っていたカードのようだった。

「カードに刻んである内容に間違いはない？ よく確かめて」

「大丈夫、全部正しいでござるよ」

「よし、なら説明を続けるわ。そのカードはうちのギルドの一員であることを証明する大切なものだからなくしちゃだめよ。カードがないとクエストを受けられないし、迷宮にも入れないわ。さらに再発行には三万ゼニーかかるから気をつけてね」

「さ、三万ゼニー！ 気をつけるでござるよ」

氷雨はスツと顔を青くすると、手にしていたカードをあわてて懐へと仕舞い込んだ。リールはそれを見てふんふんとうなづくと、話をさらに続ける。

「えっと、次はクエストとランクに関してよ。冒険者が受けるクエストはランクが定められていて、基本的に冒険者のランクと同じか一つ上までしか受けられないようになってるの。下から順に五級、四級、三級、準二級、二級、準一級、一級と定められているわ。氷雨の場合は登録したてだから五級ね」

「なるほどなるほど。それはわかりやすいでござるな」

「ランクの昇格については一つ上の依頼を十回こなすか、迷宮で一定階層を踏破することにできるわ。クエストとランクに関してはこれぐらいかしら」

「わかったでござる。説明はこれで全部でござるか？」

氷雨は少し疲れたような顔をしていた。どうやら説明を飲み込むのに疲れてしまったようである。ルールはそんな彼を見て、ほかにまだ説明せねばならないことがあったかと考えを巡らせる。なにぶん小さなギルドであり、非常にまれにしか来ない初心者のための説明に、マニュアルなど用意されていなかったのだ。

「うーん……だいたいそうね。あと迷宮に関してはギルドじゃなくて管理協会が別個にあるからそこで聞いて。初心者用の窓口があったから、そこへ行けば丁寧に教えてもらえるはずよ。説明は以上ね、あとわからないことがあったら私は一日中ここにいるからいつでも聞いてくれればいいわ」

「わかった、それでは拙者は失礼するでござる」

「ああ、ちょっと待ちなさい！」

リールはあわてて氷雨を引き留めると、彼の手に数枚の銀貨を握らせた。氷雨はびっくりしたように銀貨を見つめると、リールの方へと振り返る。リールはそんな氷雨にニコツと笑いかけた。

「所属してる冒険者が野宿してたら、うちのギルドの無いように見えて意外とある信用が傷つくのよ。それだけあれば安い宿なら一週間ぐらい泊まれるから、その間にクエストか探索をして野宿しないようにしなさい！」

「おおっ、これはまことかたじけない！ この借りはいつか必ず倍にして返すでござる！」

氷雨は何度も何度も頭を下げながらギルドを出て行った。それをリールは温かい目で見送ったのであった――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1507v/>

サムライダンジョン

2011年7月24日18時16分発行